

「仕事と介護の両立」－大きなムーブメントの可能性－

池田心豪(独立行政法人労働政策研究・研修機構副主任研究員)

私から何かつけ足すようなことはないのですが、実は私も十数年、介護の必要な祖母と生活していました。去年は母を亡くしまして、これは短い間でしたが、最後1週間ぐらい病院で付き添っていました。そういう意味で、介護が身近にある生活をしてきましたので、皆さんのお話を聞いて、一生活者として、やっぱり身につまされるといいますか、昔のことを思い出してしまいました。

「介護」というと、大変とか、つらいとか、やっぱり病気が絡みますから、プラスかマイナスかで言えばマイナスだし、明るいか暗いかと言えば暗いという面がどうしてもつきまといます。ですが、体が弱ったり、病気になったりしても家族ですから、一緒にいて生活しているということ、その生活はやっぱり楽しいというところがまず基本にあると、皆さんのお話を聞いて思いました。大変な介護であっても、その家族が亡くなってみると、やっぱり一緒にいた時間は楽しかったという面があるんですね。それが基本かなと、私自身の経験からも思います。そして、働きに出て、収入を得て生活するというのも基本的なことですよ。それを介護しながらでもちゃんとできるということが、介護が社会的に特別なことではなく、普通のことになるための基本かなと思いました。

そういう意味で、この男性介護者ネットの活動というのは、ずっと津止先生からお話を伺いながら注目していました。やや誤解を恐れずに言えば、男性介護者ネットのこういう声が、社会的にかなり大きなムーブメントになる可能性は高いと思っています。先ほど女性の方も1人報告されて、女性がおられる場でこういうことを言うとは非常に誤解を生むんですが、日本はやっぱり男社会なんですよ。介護退職というのは、もともとは女性の問題だった。女性にとってはずっと前からあった苦勞ですが、あまり顧みられなかった。しかし最近になって、男性が困っているとなると、政府も政党も、みんなが「これは大変なことだ」といい始めるんです。そういう意味では、男性介護者ネットの声というのは、介護支援を大きく変える、そういう可能性があるかと、非常にアイロ

ニカルな言い方ですけど、そのように思っていますので、皆さん、どんどん声を上げてください。ということ、まずお願いしたい。

その中で、じゃあ、どういう課題があるのかというのを、きょう伺ったお話から整理してみますと、幾つかに分けられるんですが、大きく分けて二つあると思います。

一つは、子育て支援を介護版にアレンジしていくということで、どうにかうまくやっていけるんじゃないかと思われる課題です。

典型的なのが労働時間と休暇の問題です。休みづらい、早く帰りづらい、そういう問題がある。しかし、子育てと介護では仕事を休んだり早く帰ったりする必要が生じる場面が違うし、キャリア上のステージも違う。それをどうアレンジしていくかということは大きな問題です。そこに、当然のことですが、昇進・昇格という問題が絡んでくる。これも実は、女性に関して言えば、マミートラックといって、「子育てしながら働き続けやすいんだけど、昇進とは切り離されている」という働き方がずっと指摘されてきました。つまり、労働時間の問題に昇進・昇格が関係しているんですね。休みやすい、早く帰りやすい、そういう仕事は昇進に結びつきにくいという問題です。これを解決するのは容易ではありません。子育ての場合は晩婚化しているといっても、多くは平社員とか係長ぐらいですけど、介護は係長、課長、部長と役職が上になったときに生じるので、昇進競争も厳しくなっていきます。そのルールづくりをどのようにしていくかということが大きな問題としてあるだろうと思います。

もう一つ、子育てと似ているのが、介護分担の問題です。先ほど「協力」なんてふざけたこと言うな、というお話がありました。介護保険の生活援助ということとも関係しますね。家族の中でのケアの分担ということに関して言うと、子育ては、だんだん男性もするようになってきています。私も実は子どもがいるんですけど、「協力」なんてとんでもないですね。やって当たり前。御飯をつくる、着がえさせる・・・「僕はこれやっている」という話じゃないです。一緒に生活しているんだから全部やって当たり前という状況になりつつあります。そういう意味では、介護についてもこれから変わる可能性がありますね。

その一方で、子育ての延長で考えていてはどうにもならない問題というのが介護にはあります。

先ほど「知らないがために」という言葉がありました。まず一つは、介護に関する知識や情報をどうやって得るかという問題です。介護は早い人で30代ぐらいからスタートします。しかし、事が起こるまでは、まだ先のことだろうと思っていて準備をしていない。私も実はそう思っていました。去年、母が亡くなったときに、まだ先のことだと思っていました。

実は、ほかのもっと偉い先生がおっしゃっていたことなのですが、介護というのは、これも誤解を生む発言なんですけど、災害と同じように考えておくといいということです。詳しいことはさておき、事が起きたらまず何をしたらいいかということを知っておくということです。例えば、地震が発生したとき、グラッときたら、パッと机の下に潜るとか、火を止めるとかあるじゃないですか。詳しいことは後でいい。まず最初に何をすべきか。そういうことを、介護について、特に若い人に知らせておく。そのために自分たちがどういう準備をしてきたか、そういう体験を知らせる。きょうのような機会は非常に大事だなと思っています。人が生まれて成長して、年老いて、最後、体が弱って死んでいくということを、今の若い人はなかなか身近に感じる機会がないですから、そういう機会を増やしていく。そうすることによって、介護は誰にでも起こり得るという認識を広げることが大事ななと思っています。

もう一つ、職場と関連した課題に、介護ストレスの問題があります。先ほど「認知症だと昼夜逆転して」というエピソードを紹介してくださった方がいました。帯状疱疹の話もありました。実は、この問題に対する関心はまだ低い。何となくそういうことが起きることはわかっているんですけど、どういふサポートが必要なのかということは、実はまだあまり検討されていません。

子育ての場合は、とにかく物理的な負担、物理的な時間と作業のやりくりを追われます。育児ノイローゼの問題も当然ありますけども、どちらかという物理的なやりくりを追われる生活をイメージされると思います。しかし、介護の場合は、物理的なやりくりがそれほど大変でなくても、じわじわと介護者に疲れが蓄積します。その疲れやストレスに周囲が気づきにくい、という問題があります。会社で鬱を発症して、どうしたんだと思って詳しく話を聞いたら、家族を介護していることが明らかになったというような話もときどき耳にします。ほかに例えば、仕事のミスが増える可能性がありますね。昼夜逆転して寝

不足になると、仕事中に居眠りが増える。居眠り運転とかしたらまずいですし、やっぱり作業量が明らかに落ちます。そういう意味で、職場の問題として、介護疲れやメンタルヘルス面のサポートということは、これから新たに検討していく必要があるかなと思っています。エピソードとしては、企業の人事担当者も言っているんですね。そこを深く掘り下げることがこれからの課題です。

最後にもう1つ、これ本当に最大の問題なんじゃないかと思うのが、お金の問題です。介護保険のサービスがもっと充実していかなきゃいけないんですけど、どちらかと言えば削減する方向に向かっているという実感を、多くの方がお持ちのことと思います。この社会保障の問題というのは、やっぱりお金の話を抜きにできない。サービスが必要なのはわかっているけど、どこからその財源を捻出するんですかという話がどうしてもつきまとう。そこでどうするかということですね。お金がかからない方向に行くか、お金を多少は負担しても必要なサービスが提供できるか。よく言う低負担低福祉社会か、高負担高福祉社会かということに、どうしても行き着いてしまう。日本は、どっちかに決められないから、中負担中福祉にやっぱりなるんですね。

○＜参加者発言＞

それは違う。そういう考え方は、非常に違うと思いますね。いわゆる日本は、憲法 25 条で福祉国家を目指しているはずですよ。それで問題は、税の配分、どのように行うかということですね。消費税じゃなくて、財政の問題と言うならば、税をどのような形で配分して福祉国家を築いていくかが問題になっています。だから、低負担低福祉やとか高負担高福祉ではないんです。日本は、きちんと国家として福祉をやらないといけないというのが憲法 25 条の規定なんです。

○池田心豪

それは、理念としては、もうだからできているわけです。必要な福祉政策というのは、きちんと拡充する方向で政府はずっと議論しています。介護保険制度もそうですが、決して福祉をないがしろにしているわけではないですよ。

○＜参加者発言＞

いや、ないがしろになっています。

○池田心豪

おっしゃることよくわかる。そうは言っても、日本は福祉に対する GDP 比の支出が低いことで有名です。民主党政権は「コンクリートから人へ」といいましたが、社民主義的な政策に対するコンセンサスは得にくいのが実際のところ。その中で財源をどこから捻出して、どういうふうに配分するかということ、考えていかなければいけないということです。

もう一つ、もう少し身近な話としては、家族の介護にはお金がかかるという面がどうしてもあります。そういう意味でも、仕事を続けることは諦めちゃいけないと思います。しかし、悔いのない介護をしたいという気持ちがどうしてもあって、介護に専念するという人もいます。多分これも女性は子育てのときに経験していることですね。悔いのない子育てをしたいから退職しようかと悩む。介護をする男性もやっぱり同じことを思うわけです。しかし、退職にはキャリアとか収入とか、いろんなロスがともなう。それでどちらかを選ぶんじゃないかと、どうやったら両方取れるかという面を考えていくということが大事じゃないかと思います。介護か仕事のどちらを選ぶのかということではなく、どうやって調整するかということです。そのときに、やっぱりお金の問題というのは底流にあります。

それだけでなく、仕事には社会的なつながりを得るという面もありますね。そういう、職業を通じて得られるいろんなものをきちんと維持した上で、家族との時間を大事にするということを考えていくことが大事かなと、きょうのお話を伺って思いました。基本は、働いて、お家に帰って、家族と過ごす。その家族が私のように小さい子どもがいる場合もあれば、年老いた親だということもあるし、一緒じゃなくて近くに住んでいることもある。その家族との生活が幸せであるということが基本にある。その基本があつての仕事であり、生活でありということかなと思います。ということで、総括になっているかどうかかわからないですが、私の感想とさせていただきます。

○鎌田松代 池田さん、ありがとうございました。

なかなか答えがこうということは、まだまだ言えないところもあるんでしょうけども、今回、課題として幾つか挙げていただいたように、本当に続けていくことの難しさ、私も32年前にしゅうとめの介護で看護師をやめてしまって、友達との収入の差がかなり大きくて、今、8年前から両親を遠距離介護してますけど、絶対やめるのはやめようと、かたい決意をして、非常に非情な娘として今やっていますけれども、なかなかその中にはジレンマがあるので、この問題は引き続き、この男性介護者研究会とか、ネットワークでも続けていきたいと思えますけども、きょうの中でいろんなヒントとか、皆様がやるべきこととかいうことが出てきたかと思えますので、今後ともまたよろしく願います。